芳香漂うやわらかかまりただよ 0

奔る流れの音もなく 蜉蝣闇をかすめゆき いすめゆき 0)

星は垂な軒の 影が氷ひに

映るる

麗言匹

し 銀が

彩凍みる松が枝を 小に映る 灯 に

六世野のあ 散<sup>5</sup>る ひとひらの雪の れ果てて萠し 更をとせる をけぬ自治の舎 なに咲かざるや る花な の実は 花は

ぬ

六セ銀髪あ 十を鱗があ

おどる紅鮭はべにうお

仏のりずや

ああ死に絶えて泳ぎこぬまつよい草の星あかり

まぎる秋津の影紅くよぎる秋津の影紅く 雲蒼空の気候を表する 棚なり 軽さ द्ध か 0)

牧き楡ヶ露っ 場は林んに

にねむる夢醒 りぬ生々

め

T

滴たた

六セ長なあ 残さ ずあ ĥ 十その 月は薄れゆく 去りて渡りこぬ

いま六十歳の夜は明けぬつらぬきわたる 光 かな

北斗に和する生命なりなぞうなかに祭歌いざ高らかに祭歌かない。 憂さも舞い飛ぶ火の粉た 歌をうたわば玉響の たまゆら 炎 もわらき 寮友の 顔 かんばす 火もわらう記念祭(友の顔に篝火の顔に篝火の なり

名 稲 畄  $\blacksquare$ 雅久 正信 君 君 作曲 作 歌